

## 兵庫EU協会 EU実務セミナー

### 「バチカンから見た日本・バチカンから見たEU」

2009年11月13日

在バチカン大使館 特命全権大使 上野 景文閣下

ご紹介をいただきました。上野でございます。

1968年生まれと申し上げたいのですが、なぜか間違いを正され、48年生まれの、戦争が終わって3年目に生まれた上野でございます。ちょうどマッカーサーに占拠をされていた時代だという風に聞いています。

今、お話にありましたが、西暦で言いますと83年から85年まで兵庫県で奉職をいたしました。特に、貿易もやっておりましたが、商業関係の仕事も随分させていただきました。例の商調協華やかなりし頃でありまして、大体私は商業施設の、トラブルがあった商業施設がある地名は全部頭の中に入っております。ただ最近、町村合併で大分新しい名前に変更したところもありますが、兵庫県の中は、まだ目をつぶってもかなり歩けるところがあるのではないかと、それからこちらとのご縁ではですね、一昨年、2007年の秋から冬にかけてですね、神戸新聞の、あれ夕刊ですかね、随想というコラム欄がありまして、そこに10回ばかり雑文を書かせていただきました。ほとんどバチカンの話を書きましたので、実はあれをお読みになった方は、何だ二番煎じじゃないかと、こう思われることになるかもしれません。そういうことを含めましてですね、いろいろとまだご当地との縁は続いているということは、非常に私もうれしい限りでございます。

今日はですね、お手元にあります4枚紙に沿って話をさせていただきたいと思うのですね。最初に、バチカンというのはどんなところかということデータを中心に、かいつまんでお話をしたいと思います。これはですね、あくまで予備知識ということですよ。うまくいったらですね、後2点お話をしたいと、第2講としてですね、カトリックとプロテスタントが私の目から見てどう違うかということについて、若干お話をさせていただきます。それを踏まえてですね、日本、欧州とアメリカの外交なんかの肌合いの違い何かについても少しお話をしたい。で、続きまして第3講としましてね、ヨーロッパから見ていると、ヨーロッパというのは二つの文明に分裂しつつあるというような感じを持っております。日本からはなかなかそれが見えない。それが例えば最近のEUのbehaviorなんかに多少影響を与えつつあるということでありまして、その辺について少しお話をしたい。この、きょうは権威あるEU協会の場合でもございますので、この第3講については、必ず、時間のなくなる限り、しっかりとお話をしたいと思っています。

バチカンなのですけれどもね、とにかくいろいろ変わった経験のできるところがありまして、昔、高校の教科書何かを読んでおりますとですね、4大文明の話が出てくる。その中でですね、覚えておられる方もいると思いますが、今のイラク、昔のチグリス・ユーフラテス、あの辺にはですね、アッシリア人という人ですね、ということを記憶されている方あったら手を挙げていただけますでしょうか。アッシリア人、後の方は、知っておられるけれども控えめな方で手を挙げられなかったと思うのですけれども、このアッシリア人というのはですね、その後キリスト教に帰化いたしました。ただ、紀元4世紀ぐらいに、キリスト教関係者の間で大論争になった。そのテーマはですね、論争のテーマは、キリストとは神なのか人なのか、まあ難しく言うと、その人性、神性という言い方をいたしますけれども、それを巡って大論争があって、その後残ったメインストリームの連中は、神性と人性と両方兼ねると、神でもありかつ人でもあると、こういうことを主張したのに対して、アッシリアの人たちは、そのどっち、どっちだったか忘れましたが、基本的には神様である、人ではないということ、その結果ですね、論争に負けまして、それでいわゆる excommunication といいますか、破門になった。三行半を突きつけられた。私はですね、このアッシリア人というのは、それによって歴史からもう消えてしまったのだと思っていたわけです。ただ、彼らの中の一派にですね、ネストリウスという連中がおりましてね、この連中がその後だんだんだんだん東の方に来て、ついに中国、韓国までやってきた。中国、韓国ではですね、私の名前が上野景文と申しますが、この景色の景をとって、景教、この景教の連中がお隣の韓国まで来ていたと。これがアッシリア人の流れを組む人たちです。恐らく、なぜ釜山からこっちに来なかったのかというのは、よくわからないのですが、もし景教の連中がですね、福岡の方に上陸していればですね、日本におけるキリスト教の歴史も変わったものになっていた。つまり、ザビエルより何世紀も前にですね、景教の連中がキリスト教をもたらしたという可能性はあるわけです。私が驚きましたのはね、バチカンに行ってですね、いろんな国の大使とも名刺を交換する。そして、イラクの大使が挨拶をしました。なかなかダンディなおじさんなのですが、当然アラブ系、そしてイスラムだと思っていたら、いや自分はですね、カトリック、いや失礼、アッシリアチャーチというキリスト教徒であると、で、自分はアラブではなくアッシリア人であると、2000年前に私が消えたと思っていたですね、民族の一派がですね、目の前にあらわれたときは、すぐに高校の教科書を思い出して、まあ大げさに言えば、舞い上がって喜んだと、で、そういうようなですね、ほかの地域では会えないような人にいろいろ会えるというのも、バチカンの一つのおもしろさだと思っています。

そこで、この紙に沿って、第1講というところにお進みいただきたいと思います。バチ

カンについて基本的なことを幾つかかいつまんで申し上げます。まず領土です。領土はです、0.44平方キロメートルということです。これは皇居の5分の2、甲子園球場に直すとですね、これよくわかりませんが、4杯か5杯分ぐらいじゃないかなと思います。という超ミニ国家です。実はですね、覚えておられる方もあると思いますが、イタリアの王国がちょうど明治維新から数年後にですね、イタリア半島を統一しました。その統一がなされる前はですね、イタリアの中部、3分の1ぐらい、ローマをあわせて、ローマを含めて、はすべて法王領だったわけです。法王の国だったわけです。で、統一の過程です、イタリアはどうしても首都をローマに置きたいということで、バチカン領を全部奪い去ってしまったのです。頭に来た法王はですね、宮殿というのはローマにたくさんあるのですが、バチカン宮殿の中に逃げ込んでしまったのです。で、その後ですね、ドアをロックして、それから約60年間、イタリアとバチカンは絶交状態を続けたのです。これじゃあいかんということで、1929年、今から約80年前に、例のムッソリーニがですね、バチカンと手を打たなきゃいかんということで、ラテラノ条約という条約を結びました。その条約の中で、イタリアはバチカンという、バチカン市国という国を認める、国家として、主権国家として承認すると、それからバチカンの方はですね、イタリア王国を承認するという手打ったわけなのです。法王の国はですね、この千、数、七、八百年存在、存続しておるわけですが、バチカン市国というのはこの80年前に初めてあらわれた概念だと、これは後で、またこの話は戻ってきますので、そこだけ記憶しておいてください。

それから、次に進みますが、バチカンの元首、それから政体はどうなっているのか。元首はローマ法王、現在は265代のベネディクト16世でございます。当然のことながら、司法、立法、行政、3権は掌握しております。民主体制かといえばそうではなくて、法王の、一言で言うと専政制度です。あわせて、宗教と政治とが一致する。分離はしていない。こういうところに政治体制の特色がございます。おもしろいのはですね、バチカンの国名なのです。チャート1というのを開けたいと思うのですが、普通の国はですね、あだ名はあることはあります。しかしながら、正式の国名が二つある国というのは極めて珍しい。実はバチカンというところは、国の名前が二つある。かなりニュアンスが違います。そしてですね、日本ではVCSと書きましたが、バチカン市国というのがバチカンの正式名称と思われています。それはそうなのですが、より正式の名称はここにあるHS。英語で言うとはですね、Holy See、このHoly Seeという、Seeというのはですね、相当英語力のある方でもご存知ない方が多い。これは、椅子という意味なのです。で、Holyは聖ですよ。全体としての意味は、「聖なるいす」「聖座」と訳しております。あるいは「法座」

と訳すこともあります。それはどういう意味かという、265人の法王が、今まで座ってきたいす。初代の聖ペテロ以来ですね、265人の法王が座ってきたいすのことを意味するのですが、さらに転じてですね、この法王の国そのものを意味するということになります。例えば日本にもバチカンの大使、専門用語では Nunzio と申しますが、この Nunzio が、東京の三番町にあります。彼の名刺、名刺を交換されるとわかりますけれども、バチカン市国の大使とは書いてない。Holy See の大使と書いています。それからバチカンはですね、便宜的に全部バチカンと言いますが、バチカンは国連、ユネスコ等々、国際機関にオブザーバーとして参加しています。ここも大概はHSということで参加しています。このHSというのはですね、過去2000年にわたって通用してきた概念です。そしてですね、Holy See という言葉からもお気づきのように、カトリック11億人おりますが、これの、これ全体を統べるアンブレラ機関ということになります。つまり Holy See というのは宗教機関でもあるということが、この名前からおわかりいただけると思います。仮に、世界全体のカトリック組織をですね、カトリック・コーポレーションという風に考えると、バチカンはカトリック・ホールディングスという感じになるわけですね。基本的には人事権とそれからお金の処分、財政権というものを掌握しているというのが Holy See なのですが、重要なことは2000年の歴史とそれから11億人という世界的な広がりを感じさせる、connotation のある言葉です。これに対して、Vatican City State というのは、80年の歴史しかない、そして必ずしも広がりを感じさせない、そういうタームになっております。ただ、バチカンは万国郵便連合とかですね、ITT国際電信電話機構っていうのかな、と、通信機構ですか、等々にも加盟しておりますが、こういうテクニカルな問題、技術的な問題を取り扱う国際機関においてはですね、なぜかこのHSではなくVCSで参加しているということで、この二つのカードを巧みに使い分けているわけです。このHSですけれども、HSというのはですね、聖座とか法座ということですからなかなか国の名前としての印象を与えないということで、日本の外務省の大使館設置法等々におきましては、あくまでバチカン市国大使館あるいはバチカン市国への駐節する大使という用語を使っております。そういうことから時々トラブルが起きます。昨年11月にですね、長崎で江戸時代の初期にですね、処刑、徳川幕府によって処刑された188人の、カトリックから言えば殉教者なのですが、殉教者の名誉を回復するセレモニーをバチカンが執り行いました。昨年11月に。したがってですね、バチカンから担当の枢機卿、担当の大臣が日本へ来たわけですね。当然のことながら、彼はHSというパスポートを持って成田へ来た。外務省からも、それから東京の大使館からも彼が来るということは言っていますから、当然すぐに通過できると思ったんですが、イミグレの担当者がですね、Holy See というのを

見てですね、見たことないですね、聖座、これなあに、そんな国私は聞いたことないという事で、いや私はその Holy See の大臣だと、あなたは当然その、私、当然便宜供与の話が来ているでしょうとこういう話をして、すったもんだしたと、それでもらちが明かないので、彼はもともとポルトガルの方なのです。だからポルトガルのパスポートを出して、そしたらイミグレの人はますます混乱しましてですね、こんな二つも三つもパスポートを出すやつをそう軽々には入れることはできないと、そのうちに担当者が来て、この方はバチカン的大臣だと、初めて担当者がわかりましてね、ほかの国ではこういう問題は、キリスト教国ではこういう問題は起きないのです。というのはですね、Holy See という名前、あるいはフランス語では Saint-Siège (サン・セージュ)、イタリア語では Santa Sede (サンタ・セド) と言いますが、そういう名前で大体バチカンのことを言っている。日本の場合にはこれが日本語にならないためにですね、バチカンという名前しか使わないということからトラブルになる。今後ですね、皆様方におかれましても、バチカンとトラブルを起こしたくない場合、方はですね、HS という名前もぜひ頭の中に覚えていただけるとありがたいと思います。ちなみに、このHS というところですけども、もちろん宗教機関ですが、外交活動もやっています。外交の老舗なのです。大体30ぐらいの役所があるのです。裁判所が三つ、そのほかに宗教関係のもろもろの事項をつかさどる役所が約半分、それから非宗教的な側面ですね、外交とか官房あるいは開発途上国の支援あるいは文化、衛生等々をつかさどる役所が残る半分、これに対してですね、バチカン市国の方は簡単に言いますと、Holy See、HS をですね、置いとくための用地、本店だという風に思っただけであれば良いと思います。その中にはですね、いろんな施設がありますが、世界で最も有名なのは一つはサンピエトロという大聖堂、もう一つは齋藤理事長の奥様が非常に感銘を受けたとおっしゃっているバチカンミュージアムですね、ちなみにこのHS とですね、VCS の予算財政というのは、それぞれ別立てになっております。HS の方は宗教機関ですから、収入の8割は世界から巻き上げるというか、上納、世界からの各国から来る献金、上納金ですね。これに対してVCS の方の予算、これの半分はバチカンミュージアム、バチカン美術館とか博物館の中で売っているチケットです。

今日一番、第1講の方で強調したいのは、バチカンは外交の老舗である。まあ、現地に行くと驚きました。毎年ですね、30人から50人ぐらいの大統領、あるいはですね首相、あるいは国王とか皇太子がバチカンにやってくる。そして法王と会って写真を撮る。こういう法王詣でが後を絶ちません。法王のですね、マグネティズムとか権威っていうのですかね、それが非常に大変なものであるということを実感いたしました。特にキリスト教国の場合にはですね、法王と握手をしている写真を撮る、それが国内に流されるという

ことが、そのままですね、内政上プラスになるという面があるので、余計皆さん来られるということだと思います。一言で言いますとですね、バチカンというところは、サイズはモナコ並み、しかしながらその存在感はある人の言葉を借りますと、中国並み。これちょっと言い過ぎのような気がします、あるカトリック教徒の某国の大使はそういう言い方をしています。また別の人は、小さな巨人、何か昔オロナミンだったかな、というビタミンドリンクを言うのに、ここは阪神ファンの方が多いので巨人のことを言うとうり出されるかもしれませんが、オロナミンだとか何とかの、小さな巨人だと言っていたような気がします、バチカンも小さな巨人、人によっては the smallest big man というような言い方をする人もいるわけですね。問題はですね、なぜこの小さなモナコ並みの国がですね、それだけのマグネティズムを持っているかということなのですが、私の見るところではですね、少なくとも四つぐらいの要素があるのではないかと見ています。一番強く感じますのは、言わずもがなかもしれませんが、やはり宗教的というかモラルパワーが法王にはあるという部分ですね。これは必ずしも自明なことではないのです。特に19世紀、イタリアに領土をとられる前の法王庁というのは国土を持っていました。それから国民もいた、市民もいた。したがって産業もあったし軍隊もいたわけです。普通の国と余り変わらなかった。ということはですね、守るべき国益が随分いろいろあったわけですね。そうなるのです、なかなかその高邁な話だけをしているわけにはいかない。非常に世俗性のある国家だったわけです。ところが幸か不幸かイタリア王国がすべての領土、0.44平方キロを除くすべての領土を奪ってくれたおかげで、バチカンはですね、守るべきものをすべて失った。国民も失い、軍隊も失う、必要なくなる、それからビジネスも必要なくなる、守るべきビジネスもなくなる等々ですね。それによってですね、むしろバチカンのモラルイズム、モラルパワーは格段に高まったということが言えると思います。捨てることによって高みに上がるのができたと、こういうことになります。そういうこともありまして、毎年1月に法王は各外交団を全部、王の間というところに招致しまして、それで国際情勢についての所見を演説します。大体40分ぐらいですかね。ちなみにこの王の間というバチカン宮殿の中の何ていうかサロンはですね、非常に有名なサロンです。400年前に例の天正の少年使節4人がバチカンに行き、それをもって当時のグレゴリオ13世という法王に謁見を受けたのも、この王の間です。当時から外国の賓客はここでもって接遇した。現在もその状態は変わりません。400年というのはバチカンにとっては、我々にとっての100年ぐらいの感じしかない、50年ぐらいの感じしかないのかなという感じがしますけど。で、所見をお披露目するわけです。ちなみに法王の演説は、外交問題のときは得てしてそうなのですが、フランス語でやります。で、やっぱり最初の年に驚きましたけ

どもですね、いわゆるグローバル・イシューというか世界的な問題、メジャーなものはね、ほとんど全部言及します。平和構築の問題ですね。紛争解決の問題、軍縮の問題、あるいは非核化の問題、さらにはですね、アフリカを中心とする貧困の問題、環境、人権、数え上げると切りがないです。それから地域的な問題ですね。特にパレスチナ、イラン、イラクあるいは当時スーダンの問題等々にも言及します。それぞれの問題について一応自分の所見を言うわけです。その所見表明する様を見てですね、私は何を感じたか、法王はですね、やっぱり自分がカトリック教会の代表としてですね、世界に対して目配りをこれからも続けていくのだと、こういう強い意志を感じました。ちょっと言いそびれましたけれども、私自身はカトリック教徒でもなければ、キリスト教徒でもない。現地では仏教系の信徒イストということによっております。しかし、したがってですね、カトリック教徒でもありませんから、必ずしも法王の肩を持つ必要はないわけですがけれども、しかしながら客観的に言ってですね、非常に何ていうか、法王にはやる気をそのとき感じたわけですね。毎年の演説を知らないで聞くと、皆さん、法王の演説はですね、国連の事務総長あたりがしているという風に錯覚されるんじゃないかと、そのぐらいですね、世界情勢についていろいろ達見を述べている。そういう意味で、人によって言い方が違いますけれども、法王は国際社会のご意見番というところがあります。非常に荒い言い方をしますと、国際社会の黄門様という感じになるんです。いろんな国の大統領、例えばアメリカの大統領、インドの大統領がですね、あるいは中国の大統領がなかなかいいこと言うこともある。しかしながら、よく聞いてみますとですね、やっぱりそれぞれの国の国益をかなり反映した発言なのですけれども、幸か不幸か法王の場合には守るべき国益がないということからですね、かなり人類的な視点に立って話をするができるようになってしまうということです。そういう意味でですね、法王の存在というのは国連の事務総長もそうですが、国際公共財ということが言えるのではないかということは、3年ぐらい前に神戸新聞の執筆で書いたのです。つまり、ほかに、法王と国連の事務総長以外にはですね、そういう役割を担っている権威のある国際機関というのはほとんどないというのが、私の印象です。

それから、モラルパワーと並んで強く感じますが、バチカンといいますか法王の発信力ですね。例えばですね、私が3年前に法王に信任状、陛下からいただいた信任状というのを提出しました。その後ですね、15分くらい法王の図書館、プライベートな図書館でもって1対1でお話をしました。ちなみに、ご承知のように今の法王はドイツの方ですが、英語、フランス語、スペイン語、ラテン語を含めてですね、5カ国語ぐらいに非常に堪能です。普通ですね、ヨーロッパにいていろんな人の英語を聞いていますとですね、その人がドイツ系かフランス系かスペイン系かイタリア系かというのは英語を聞くだけで大体わ

かるんです。だけど、余計な話ですが、この法王の英語というのはドイツなまりがなぜかほとんどない。非常にですねニュートライズされている英語ですね。非常に澄んだ感じの英語だというように感じました。その3年前に法王と話をしたときに、法王は朝鮮半島の非核化の話について一席ぶたれました。日本もそういう方向で努力してくれと、こういう話だったわけですが、もうその日の夕方からですね、世界中のメディアがこれを報道する。特にお隣の韓国は、すべてのテレビ、夜のニュースだと思いますけれど、トップニュースでこれを伝えると。まあ余計な話ですが、法王の写真だけを出しても気分が出ないと思ったのか、私と女房の、女房は着物姿ですが、の姿もテレビでぱっと放映された。翌日NHKのBSがですね、それを流すということで日本にもそれがフィードバックされておりました。その日、そのときの法王の発言の報道ぶりをトレースしてみますとですね、中南米アフリカを含めて世界中で報道されています。そういう意味で、法王の発言というのは、国際メディアがよく取り上げるということを感じました。ただ法王庁の発信力というのはそれにとどまらない。もう一つの面があります。それはですね、ローマには幾つもの有力なカトリック系のメディア、通信社があるわけです。そこですね、そこにインタビューしますとですね、これまた世界中に伝わるのです。といいますのは、アメリカ、中南米、ヨーロッパには、カトリック系のミニコミですね、が、恐らく何万とあるわけです。で、ローマの通信社と話をしますと、それがですね、数日の間には世界中で取り上げられるということ、私は何回も経験しました。例えばですね、最近非常に有力なカトリック系のメディアとして、これはあるスペイン人が始めたメディアですが、今もっとも有力な通信社の一つですね。カトリック界のUP(ユーピー)とか何とかという感じになると思うのですけれども。ここでもってこの2、3回私、インタビューしました。特にですね、アフリカ援助の話とかをすると、アフリカのメディアがぱっと取り上げます。それからこの間ですね、仏教経済学という最近その非常に有力になってきている経済学の話をしたのですけれども、そのときはヨーロッパ、アメリカだけではなく、インドネシアとかね、それからベトナムあるいはその中国でもかなり取り上げられました。特に中国はですね、カトリック系のメディアだけではなくて、仏教系のメディアもかなりもともと英語のバージョンですが、を、中国語に直して報道していました。何を言いたいかというと、要するに、ローマでもってボタンを押すとですね、結構それが世界中に伝わるということは、余り日本では知られていないかもしれないですが、これもバチカンのあるいはローマの重要なポイントというように考えます。

バチカンについて、三つ目の、法王についての三つ目のパワー、これは情報力。とにかく11億人が背後に控えているわけですが、神父さん、いわゆる司祭だけでもって世界に

40万人ぐらいいます。誤解を恐れずにものを言えばですね、このカトリックの司祭というのは、あるいは司教というのはバチカンの目であり耳であるというところがあるわけですね。これはザビエルが来て以降、イエズス会の人たちを中心に、かなり克明な日本の観察記をローマに送っていることは皆様方ご承知のとおりだと思うのですが、今でもですね、ああいう感じでもって、レポートを彼らは出しているのだと思います。ただバチカンには一つ大きな問題があります。バチカンの方はですね、人をしゃべらせるのはものすごくまいのですが、彼らは優秀な人ほど口を割らない。人によっては往年のクレムリンと同じだとかいうことを言う人もいます。したがってですね、私も3年間必死に努力しているわけですが、なかなかおもしろいことを、有益なことを語ってくれないです。ただそれは表から攻めていった場合の話でして、私の見るところ、裏口というのが少なくとも二つある。裏口じゃなくて横口がね。一つはですね、同じ修道会のよしみというのがありますね。修道会、例えばある事項をやっている長官がですね、ある修道会と親しい場合、その修道会の人を通じて接近すると、また別の反応がある場合があると、これが一つです。それから、もう一つはですね、日本の場合には残念ながらバチカンの中に日本人の司祭司教は1人もいないということですが、フランスにせよメキシコにせよ、お隣の韓国ですら、何人もの中堅幹部、あるいは幹部をバチカンの中にもちます。そういう人たちを通じてですね、韓国とかあるいはフランスの大使は同国人を通じて、また別の情報が入ってくる。そういうこともありまして、アメリカなんかも、19世紀の半ばからですね、バチカンと外交関係を結ぶかどうかということについては、かなりけんけんがくがくの議論になっている。当然、プロテスタントの強いアメリカですから、カトリックに接近することについては、躊躇というか警戒の念が強い。しかしながら、その何人かの人々がぜひやるべきだと、それはなぜかという、バチカンに大使を派遣してですね、毎日夕飯の会に出ているとですね、ヨーロッパの情勢がわかると言われていた。これは人を送る計算だということだったのですが、結局プロテスタントの抵抗が強く、アメリカが最終的に大使を派遣したのは1984年、つい最近のことになります。

情報力のバチカン、最後にもう1点だけ追加しておきます。バチカンはですね、知的パワーも非常に高いものがある。法王のいろんな諮問委員会があります。何十もそういうものがありましてですね、1年から2年に1回会合を開いて、法王に対して諮問をして、アドバイスをするわけですね。最近でいうとですね、昨年、科学アカデミーという会、アカデミーが開かれました。大体世界の科学者70人ぐらいをメンバーにしています。日本からはですね、前回までは名古屋大学のOBとか名誉教授の野依さんがメンバーでした。その後ですね、今は変わりました、静岡県三島にあります国立遺伝学研究所ですか、そ

この副所長をしておられます五條堀さんという先生がメンバーで加わりました。去年2年ぶりに会合が開かれまして五條堀さんも来られました。11人ぐらい新しく加わった研究者が法王に呼ばれてですね、赤いリボンをかけてもらう。五條堀さんも驚いていました。10人新たにメンバーになった学者の中の4人が既にノーベル賞を受けておった。こういう感じなのですがね。バチカンって結構けちなところですから、余り払っていないのじゃないかなと思うのですが、にもかかわらず皆さんやってくるというのはバチカンの権威なのかなとも思いましたが、2年前のこの科学アカデミーでは皆さん3日にわたって討議を行っている、テーマは宇宙と人類の進化、これなかなかおもしろいテーマだと思うんですね。まさにその聖書の記述とですね、ダーウィンの言っていること、あるいはそのビッグバンのセオリーと、かなりギャップがありますよね。そこをどういうふうにそのギャップを解釈、解釈し直すかということは宗教家にとっても非常に大きなテーマですから、3日間にわたって大激論をしておりました。そういうシンクタンクが20から30ぐらいあります。科学系のものもありますし、その純文系のものもあるし、社会関係のものもあります。したがってですね、最近余り言いませんけど、霞ヶ関というところは日本では最大のシンクタンクだということを言う人がいますが、そのアナロジーでいきますと、バチカンというところは世界最高のシンクタンクの一つであるということが余り知られておりませんが言えるのではないかと。

以上、その要約というのでもありませんが、もう一度整理しますとですね、バチカンについて3点ぐらい強調しておきたいと思います。バチカンというところはですね、といいますかモダニティというか近代、現代というのは何かということを経済と関係で言いますと大体三つぐらいに要約できると思うんですね。一つは民主主義かどうか、民主主義であることですね。それから政教分離、政治と宗教の分離です。それから大概の場合国民国家ということになっています。バチカンというところは、HSというところは、このいずれにも該当しない。民主主義かといえば、冒頭にも言いましたように、法王の専制、政教分離かといえば、宗教と政治とは一致して、むしろ宗教が政治の上に立つ。今、宗教が政治の上に立つ国というのは、世界中探しても二つしかない。一つ目はバチカン、もう一つはイランです。イランの話は今日しませんけれども、そういうような事情もあってですね、あとバチカンとイランというのは、余り報道知られていませんが、なかなか波長が合っているところがある。見えない太いパイプがテヘランとバチカンの間にはあるというのが、私の印象ですね。それから国民国家というのは、本当に国民といえる人は1人もいない。バチカンの幹部はさっき言いましたように、バチカンのパスポートを持っています。しかしドイツ人であったりポルトガル人であったりガーナ人であったりということになります。

本当の国民というのは、その国で生まれですね、その国で学校に行き、最後はその国で死んでいくと、亡くなっていくと、そしてその国の中でお墓に葬られると、これが国民です。そういうことに該当する国民はバチカンには1人もいません。という意味でですね、バチカンというところは極めてプレモダン、まあ誤解を恐れずに言えば、中世的な様相の強い国家である。そういうところがですね、なぜか逆説的な意味で今日的なパワーを持ち、影響力を持っているというところに国際社会のおもしろみが、の一つがあるのではないかということの頭の片隅に入れといていただけると、と思います。

時間がありませんので、第2講の方に進みますが、この3年間強く感じますのは、バチカンの大変なこだわり、何にこだわっているかということは後で言いますが、プロテスタントに比べてですね、ある種のことについて物すごくこだわっているという点について、ちょっと触れてみたいと思います。それを一言で言いますと、チャート2とチャート3というのをお開けいただきたいと思いますが、一つはですね、カトリックの神父、司祭、あるいは司教ですね、の正統性、これに非常にこだわっています。考えてみますと、バチカン2000年やってきたわけですが、この日本の皇族もそうですけれども、正統性が1500年とか2000年にわたって継続するためには、やはりそれなりの正統性というものが確保されなければいけない。正統性というのは、まずは一義的には王になればいけないわけですね。なぜ法王に正統性があるかという、一言で言いますと、聖書の中にもありますけれども、キリストは聖ペテロに対してですね、非常にアバウトな言い方をすると、後は君に任せると、こういうことを言っている。もうちょっと細かく言いますと、私の羊、羊というのは信徒という意味ですね、信徒をあんた面倒見なさいと、こういうことを言っている。これがまあカトリック教会の権威の源泉です。このキリストの言葉がなかったら、あるいはこのキリストの言葉が聖書の中になかったら、今のカトリック教会はこういった形態は持たないという風に思われるのです。したがって、聖ペトロのいすというのは非常に権威のあるいすになるわけですね。第2代、第3代の法王がその権威を引き継ぐ。正当なるそのペトロの後任として引き継いだ。そして、2000年後にですね、今265代の法王がそれをさらに引き継いでいると、つまりその目に見える形で、だれにもわかる形で、正統性の縦の連鎖というものがあるということが第1の特色で、この正統性の連鎖ということに、ものすごくカトリック教会はこだわります。ちなみにですね、プロテスタント教会はご承知のようにこの正統性の連鎖という、正統性というものを、法王の正統性というものを認めておりません。裏返して言うとカトリック教会の人たちは、プロテスタントというのは本当の教会ではないと言い切る。プロテスタントの人たちは、必ずしもそれをですね問題に、そういう批判を受けていることを問題にしてないというのが、私の印象であ

ります。

で、したがってですね、縦系列でもって正統性が確保されてきているわけですが、それだけではない、今度はですね、正統性の広がりということについても法王庁はこだわっている。法王は、今、全世界に3000ぐらいの司教区があります。そしてその他バチカン直属の司教等を含めまして、世界には約4000人の司教がいます。これは全部法王が任命します。そして法王に任命された司教がですね、自分のところの司祭、これを任命する。こういう形ですね、法王は司教と結びつき、司教は司祭と結びつく、ということはですね、司祭の正統性というのは司教を通じて法王にさかのぼり、法王を通じて、現在の法王からさかのぼって最後はペトロに、聖ペトロに帰着するというところで、さらに戻ればキリストに戻ることになります。この正統性の連鎖とですね、正統性のピラミッドといえますか拡散、この二つが私の見るところ、カトリック教会の核心ですね。これなくして2000年の歴史性というものは得られなかったと、それからそのカトリックの世界性ってことがよく言われるわけです。ただ、得てしてですね、日本における解釈というのはその11億人を擁しておると、世界的な広がりを持っているというところで、話は止まってしまうわけですがけれども、私の見るところ、その世界性の根っこにはこの正統性の広がり、拡散というものがあると、これ抜きにカトリックの世界性というのはなかったということが言えると思います。

問題はここから先なのですね。これだけ正統性というものを維持するためにはいろんな努力が必要だということなのです。まず第1にですね、やっぱり権威も必要ですがけれども、わかりやすくなきゃいけない。親しみを与えなきゃいかん。そういう工夫というものをカトリック教会は2000年にわたってやってきておると。まあ細かくは論じませんが、そういう観点からですね、例えば中世、今のフランスを中心とする西ヨーロッパでカトリックの布教が、キリスト教の布教が伸び悩んだ時期に、例のケルト系の人たちの地母神信仰というものをもうちょっと積極的に取り入れるのがいいということで、いわゆる聖母信仰というのが強化されたということとかね、それから各地にですね、いる、みんなから親しまれ、みんなから敬われている人たちをですね、カトリック教会は聖人あるいは福者という形で崇拝してきたというようなこと。あるいは、つまりカトリック教会の教えの中に、カトリック教会の中に地元の有力者を取り込んできたということも、カトリック教会の努力の一環だと。これをもうちょっと抽象的に言うと、チャート4をごらんいただきたいと思いますが、もともとその一神教というのは絶対神と人とが直接対峙しているわけです。ただその一神教の神様というのは非常に抽象的ですよね。それでなかなかこう親しみがわからない、あるいはわかりにくいということから、キリスト教においてはキリストと

いう半ば人的な概念を導入したと。でもまだまだわかりにくいのですね、あるいは親しみが持ちにくいということで、この2000年の歴史を通じてカトリック教会は、聖母信仰とか聖人信仰とか、あるいはその法王とか司教とか司祭という、いろいろなシステムを作って、それでもってですね、中間項を設けることによって、そのわかりにくさを補強してきたという面があるわけですね。早い話が、したがって、例えばその聖ザビエル、フランシスコ・ザビエルという方が日本に来て布教した。その後中国に上陸する前に亡くなってしまったわけです。その後彼はローマでもって聖人として祭られることになった。この、例えば彼なんかはまさにそのザビエル神社に祭られているザビエルさんという感じで、日本の神社とある意味では発想が近いところがあると思います。とにかくね、カトリック教会というのは、私が想像していた以上に、目に見えるもの、英語で言いますとね visibleなものとかね、それから形のあるもの tangibleなもの、タンジビリティっていうのですか、それに非常にこだわるところがあります。その典型的な例を一つお話すると、骨です。骨。遺体の骨です。今、ザビエルの話をしましたが、ローマにはイエズス会の教会が幾つかあります。その中でもっとも有名な教会、ジェズ教会といいます。ジェズというのはイタリア語でイエスという意味ですね。このジェズ教会に入っていきますと、左側にはロヨラさん、創立者、イエズス会の、彼が祭られたチャペルがあります。右側にはですね、ザビエルさんの祭られたチャペルがあります。暗いのですけれども、よく見ますとですね、赤いガラスのケースが置いてある。よく見ると何かね、手の形をした骨が入っていましたね。手は本物じゃないようなのですけれども、下の方にある上腕骨っていうんですかね、これはザビエルさんの骨そのものです。そしてザビエルさんの遺体は、ご承知かとも思いますが、インドのゴアに祭られています。だけど、イエズス会としてはどうしても骨の一部が欲しいということで、その骨をですね、少しお裾分けというのですか、分骨してもらってローマに持ってきている。それをみんなが拝んでいる。で、骨が来ますとね、これ聖遺物という言い方をします。聖遺物、聖遺物が来るとカトリックの人はですね、ますます親しみをこめて教会に来るようになる。例えば、聖クレメンティ教会という教会がやはりローマにあります。聖クレメンティという方はですね、第4代の法王で、ブラック・シーというのですか、黒海のほとりでもって殉教した人です。この人のですね、この方の何ていうか遺体は、黒海のほとりに8世紀まで祭られていたのですが、ローマから行ったさる御仁がですね、この遺体をローマに持ってきてしまった。それからですね、世界中の信者がこのクレメンティさんにお参りするためにですね、ローマに、その教会にやってくるようになった。遺体があるから、あるいは骨があるから来るのです。あるいはですね、イタリアの南の方にバリというところがありまして、ここにはですね、セントニコラス教会、

聖ニコラス教会という教会があります。カトリックの教会があります。ここの地下にはです、聖ニコラという方が祭られているのですが、遺体が祭られている。このニコラスさんというのは、ロシアとかルーマニアとかいわゆるオーソドックスチャーチの人たちから見ると、非常に重要な聖人なのです。したがってそのバリの教会にはです、ロシア人や東欧の人たちが飛行機をチャーターしてやってくる。で、地下の教会、祭壇の下が棺に、棺がおさめられていますね。私もちょっと行って見たのですけれども、ルーマニアとかロシアの人がやってきてです、みんなこの祭壇の前に膝き、みんな触っていくわけですね。で、もう感激して帰って行きます。見ていますとね、キリストのことは本当、忘れている人もいるわけです。とにかくセントニコラス、セントクレメンティ、ザビエルの骨にさわ、あるいは遺体のある、安置してある祭壇に触れて、それでもって胸がいっぱいになり感激する。これがカトリック教会なのですが、まあそういう意味ではね、ニコラス教会というのはまさにニコラス神社であり、あるいはです、クレメンティ教会というのはクレメンティ神社であるという感じがしてしょうがないです。カトリックの方に余り言うと怒られちゃうのですけどね。で、時々したがってです、キリストのことを忘れているのではないかなという風に心配になることすらあります。そういう心配を非常に持ったのがプロテスタントです。プロテスタントは、まあ、ここに掲げてある中間項、これはです、いずれも不純物であると、やはり人とキリストの対話、聖書との対話に戻るべきだということで、この不純物、例えば聖母信仰、あるいは聖人信仰、こういうものを全部排除している。言ってしまうと、プロテスタントというのはある種の不純物を除くわけですから、純化志向なのです。特にさっき言いましたように、そういう事情ですからね、骨の争奪戦が起きるのですよね。プロテスタントはそういうことは一切しない。

以上を整理しますとね、チャート4をちょっとごらんいただきたいと思いますが、神と人との間の関係が一番すっきりしているのは、恐らくイスラムなんだと思います。プロテスタントになるとキリストが入ってきて、少し難しくなると。それでカトリックになると、ごちゃごちゃごちゃっといろんなものが入ってくる。でも一番ごちゃごちゃし、ごちゃごちゃというか、中間項が豊富なのは日本、そして日本から見ると、日本人から見るとカトリックは日本人の発想に、プロテスタントと比べるとかなり近いということが言えるのではないかなという感じを持っています。

以上申し上げたことをです、整理するとどうということになるかということですが、5点ほど、これ、まとめということでお話をしたいと思います。途中でですけども、先ほどお話をしたその信任状の奉呈等々についての写真を幾つか持ってききましたので、今、こちらの方から見ていただきたいと思います。ごらんになって順次回していただければと思

ます。

5点ほど、感じたことを申し上げますと、まず第1に、理念としてですね、カトリックとプロテスタントの違いというのは極めて本質的なものがあるということ。

第2点としてですね、そういう違いを踏まえてということですがけれども、アメリカの外交とヨーロッパの外交を見ているところの違いがよく、カトリックとプロテスタントの違いからよく説明できると思います。ご承知のように、アメリカというところはプロテスタントが今でも中心の社会であります。その結果ですね、アメリカの外交も、ままだ得てしてですね、イデオロギー先行型、理念先行型になりがちであると。カトリックの影響がまだ多分に残る欧州の方は、外交の面でもイデオロギー色は相対的に低い。裏返せば、相対的により現実主義的である。あるいは実利主義的である場合が多いということですね。

それから第3点として、多神教的な発想の強い日本人から見ますとですね、というか日本人から見ると、カトリックの方がプロテスタントより近い。

第4点としてですね、したがってまあ大げさに言うと文明的、文明論的に言ってですね、欧州の方がアメリカより我々には近い面がある。ただ、地政学的にはですね、当然アメリカとの関係の方が近いと、利害関係がいろいろあるという意味ではアメリカの方が近いということは言えると思います。

最後にもう1点つけ加えますと、イデオロギーが突出しがちなアメリカ、まあオバマさんはかなりそれを補正しているところはありますけれども、とにかくイデオロギーが突出しがちなアメリカにブレーキをかけるという意味では、日本だけじゃなかなか力が足りない場合もあるわけですから、やっぱり欧州を使ってというか、欧州と一緒にになってブレーキをかけるということが必要になる場合があるのではないかと。で、その場合にですね、バチカンというのも世界の賢人としてですね、非常に有用であるというようなことを感じるわけです。

今の話はあくまでモデル論です。モデルですから、現実、複雑にして多様な現実にもそのまま当てはまらない場合も随分あると思います。ただ、今、申し上げた話というのは、ヨーロッパというのは一様である。一つであるという前提でお話をしたわけですがけれども、実際にヨーロッパに行くと、バチカンからヨーロッパを見ておきますと、ヨーロッパは一つってというのはとんでもない。今やですね、大きく二つに、東欧の方はちょっときょうは省略しますが、西の方のヨーロッパだけを見てもですね、二つに大きく分かれつつある。簡単に言うるとですね、北半分と南半分とで違う文明が出てきつつあるという感じを、私は強く思っております。一言で言うと、北半分はキリスト教を背後に捨て去った、いわゆる脱キリスト教文明とでも言いますかね、ポスト・クリスチャン・イン、そのフェイズに入

った社会。南の方は伝統的なキリスト教にのっとり文化文明というそういう二つの文明に分かれつつあると思います。前者の方は一言で言うとですね、デカルト以来というのか近世以降の合理主義あるいはその人権思想、啓蒙思想、あるいは科学主義といったものの延長線にある考え方だということ言えると思います。キリストに対する信仰はなくなりつつあるわけです、北の方は。ただ、信仰そのものはなくなっていない、ということはキリストにかわる信仰が出てきつつあるということですが、まあ私が見ているところでは三つぐらいあるのかなという感じがするんですよね。まず第1にですね、自然、マザーネイチャーに対する信仰が強まっている人たち。それからやっぱり人権思想、これもさらに多様化し、強化されつつあると、それから三つ目として科学主義ですね。科学思想、科学信仰の強まっている人たちがいると、で、人権について少し触れますとで、北の方を中心にやはり新しい人権アイテムというものが、さらにですね、どんどん提唱されつつあると。有名な事例としては、例の中絶をめぐるですね、その女性の選択権。いわゆる英語で言う、プロチョイスかプロライフかという話があると思うんです。それからいわゆる男性と男性ね、あるいは女性と女性の結婚、いわゆる同性婚というものの権利を認めるか認めないかという話。それから事実婚という、に対するその処遇の話とかですね、それから北の方で一部で強まってきているのは、安楽死の権利ですね。権利とは言わないまでも合法化するかどうかという話。さらにはまあ子供の権利とか、まあいろいろあります。で、当然のことながら、こういう新しい思想というのは、特に生命倫理とか科学倫理、家族倫理、伝統的な家族倫理から見ると、もう当然そういう伝統的な原理にもとるということで、カトリック教会はこういった新しい思想に対してはですね、非常に不満であると、もう本当に怒り出しているというのが実態であります。それから科学信仰との関係で言いますとね、特に目に付くのはいわゆるあの万能細胞、ES細胞と言うんですか、受精卵を破壊して医療行為に使うというようなこととか、まあクローン人間をつくるつくらないという、こういうような新しい動きに対してもカトリック教会は後から後から牽制球を投げております。それから自然信仰との関係、マザーネイチャーとの関係で1点だけお話しておく、いわゆるそのアニマルライツといいますか、動物権というものを積極的に擁護し認めるべきだという考え方がヨーロッパを中心に、それから北米の一部で強まってきておると。例えばですね、最近新しいEU指令というものがブラッセルで出ました。このEU指令は、人の生命にかかわるような医薬品をつくるときは、動物実験で動物の生命を犠牲にするのもしよがないかなと、しかしながら例えば女性の化粧品をつくるときに動物を犠牲にするのは、これは人権にもとるように動物権にもとるということで、それはもうこれからはやめなさいということで、新しい指令を出しております。それからこれはヨーロッパの話では

ありませんが、最近アメリカのカリフォルニアでもって新しい州法が通ったようです。この州法曰く、鶏を飼うときには、鶏が十分運動できるようにしてあげないといけない。つまり、運動もできないようなケージにおさめたのでは、閉じ込めたのではいけないよというものです。それからこれはよくわかんないのですが、妊娠した豚を飼うときにはより大きなスペースを与えなさい、法律には全部数字が出てるわけですね。等々の新しい法律がカリフォルニア州では通ったと。で、動物権を擁護する人たちはですね、今のカリフォルニアの法律と同じような法律をですね、ほかの州でもつくりなさいということで、今積極的な運動を展開しつつある。それから例えば英国のケンブリッジ、大学ではなくてですね、ケンブリッジにある有名な動物の実験をする会社があります。ここはですね、ドイツとかスイス、フランスあたりの製薬会社と提携してですね、彼らから頼まれた動物実験をすることによって医薬品の開発を支援しているわけです。ここはですね、まあイギリス人が中心なんでしょうけど動物権の擁護グループによって時々襲われると。こないだもそういうことで新聞報道を見ておりますと、何人かの人ですね、裁判でもって有罪になっておりました。そういうことですね、北の方を中心に、カトリックの人たち、あ、それで今の動物権ですけれども、カトリックの人たちから見ると、動物を擁護するということは、これは非常に重要なことだと、しかし動物にも人と同じような人権を認めるというのは行き過ぎではないかということを行っています。で、今の三つのグループというのはかなり重なっているのですよね。で、こういったキリスト教の本来の原理、あるいはカトリック教会が最近よく使う言葉です、自然法、自然法にもとるような、その思想、これをですねカトリックは相対主義、relativism と言って、まあ法王や幹部の発言を見ていますと、3日に一遍は批判、声高に批判しています。問題はですね、このヨーロッパの北の方で、その出で、頭をもたげてきている新しいその思想というものが、北だけではなくて南の方にもどんどんどんどん浸透しつつあるということです。例えば、スペインですけれども、スペインはかつてはですね、イタリア以上にカトリック教会の牙城と呼ばれておりました。ところが現在ではですね、スペインというところは、ある人の言葉を借りると南欧、南ヨーロッパのスウェーデンという言い方をする人もいます。まあフランスもかなりですね、パリを中心に北の思想がカバーするようになってきておりますけれども、スペインは既にフランスを追い抜いてしまったと、こういう見方をする人もいるわけです。まあ自然を崇拜するんだったら、彼らは日本人と余り変わらないんじゃないのということを使う向きも、いう疑問をお持ちになるかもしれませんが、このマザーネイチャーを志向する人たちは、信仰の対象は自然なんですけれども、もともとその発想、頭の思考の鑄型はキリスト教、一神教です。一神教的な色彩が強い。したがってですね、自分たちの理念とか自分たちの

思想を非常に神聖視し、絶対視しているところがあると。いい悪いは別としてですね、日本の捕鯨なんかもそういう意味でやり玉にあがっているところがあります。カトリック教会はそういう姿勢に対して非常に批判的ないし脅威を感じておるということですね。今、法王もいろんな悩みを持っていると思いますが、ローマ法王の最大の悩みというのは、この relativism、彼らの言うところの相対主義というものが、伝統的な理念の強かったヨーロッパの南を侵食することではないかと思われるわけです。

そこで今申し上げた第3講、2点に、2点だけまとめの意味でもう一度申し上げたいと思います。日本からはなかなか、第1点はですね、日本からはなかなか見えないわけですが、欧州には二つの文明が出現というか現出しつつあると、この点を見落としたのでは現在のヨーロッパあるいはアメリカは理解できない恐れがある。第2点としてですね、特にその北の方の思想ですね、これがですね、さっきも言いましたようにEU指令等の形でですね、少しずつではありますけれども具体化しつつある、政策として具体化しつつある。彼らの言っていることがイデオロギー的に違うというだけであればですね、余り気にする必要はないんですが、彼らの発想がやがては世界標準的なものになる可能性がある。そうなればその日本のビジネスインタレストにも影響してくると。したがって、今のヨーロッパを中心とする新しい文明の出現ということについては、よっぽどしっかりとその動向を把握しておく必要があるというのが、申し上げたい点の第2点目であります。

ということで、非常に雑ぱくではありましたが、以上三つの点を申し、最後に簡単にまとめさせていただきます。きょう申し上げたかった点は、第1講から第3講として3点ございます。

まず第1点として申し上げたかった点は、バチカンというのは小さな巨人であると。小さな阪神ではありません。小さな巨人であると、こういう話です。

それから第2点として申し上げたかった点は、ヨーロッパというのはカトリックの影響がまだ強いということもあって、純化思想が比較的低いと、そういう意味で文明論的に言うと日本に近い。逆に純化志向が非常に強いアメリカは文明論的に言うと、日本からより遠い、ただし今言ったヨーロッパというのは伝統的な欧州についての話だと。

そして最後に申し上げた第3点は、欧州というところはですね、今文明的に二つに分かれつつある。で、日本に近い伝統派、南の方のグループ、カトリック教会を含めてですね、は、北の方からの攻勢にですね非常に苦戦を強いられている。

以上3点が、きょう申し上げた点のあらましではないかと、以上をもって、私のバチカンから見た考察というのですか、報告ということで、ご理解をいただけるとと思います。

どうもありがとうございます。